当教室15年間の入院患者統計

山本真一郎・板谷 知己・森 慶人
羽柴 基之・馬場 駿吉

A Statistical Review of Hospitalized Patients Treated
in Our Clinic during the Past 15 Years

Shin-ichiro Yamamoto, Tomomi Itaya, Yoshito Mori,
Motoyuki Hashiba and Shunkichi Baba
(Nagoya City University Medical School)

The records of hospitalized patients in the Department of Otorhinolaryngology, Nagoya City University Medical School between 1976 and 1990 were analyzed. The total number of patients was 4,448. The locations of the diseases were: 1,002 were in the pharynx (22.5%), 895 in the nasal cavity and paranasal sinuses (20.1%), 732 in the ear (16.5%), 550 in the larynx (12.4%), 475 in the diseases of abnormality (10.7%), 217 in the trachea and esophagus (4.9%), 202 in the oral cavity (4.5%), 111 in the salivary gland (2.5%), and 264 in the face and neck and other areas (5.9%).

Key words: statistical review, hospitalized patient, Nagoya City University

はじめに

1976年1月より1990年12月までの15年間における当科の入院患者についての統計的観察を行った。この期間は高度経済成長時代が終焉をとげ、社会全体としては比較的落ち着いていたものの、生活、文化、科学技術等は大きな変化や進歩が見られた。医学界全体としての診断、治療技術の変革もめざましいものがあり、我々耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域においても、診療技術、取り扱う疾患に大きな変化があった。本論文は上記年間における全入院患者統計である。再入院した場合は2名として数え、延べ人数で表し、一人の患者に加療した疾患が複数ある場合は主疾患を採用した。

結果及び考察

入院患者数は4448名であり、男性2734名、女性1714名と男性が多かった。図1に疾患を部位別に分類して示した。咽頭疾患が1002名(22.5%)と最も多く、次いで鼻副鼻腔疾患895名(20.1%)、耳疾患732名(16.5%)、喉頭疾患550名(12.4%)、先天奇形475名(10.7%)の順になっている。全体的にバランスのとれた疾患構成であると思われるが、強いて言えば先天奇形がやや多いことに特徴がある。なお、眩暈症は耳疾患に分類した。

図2には、悪性腫瘍を部位別に分類して示した。悪性腫瘍は男性678名、女性235名の合計913名であり、総患者数の20.5%を占めていた。

喉頭悪性腫瘍が282名 (30.9%) と最も多く、次いで咽頭悪性腫瘍204名 (22.3%)、鼻副鼻腔悪性腫瘍183名 (20.0%)、口腔悪性腫瘍152名 (16.6%) と続いていた。

次に、患者数の年次推移を図3に示した。1981年までは年間約230名であったが、1982年より300名以上に急増している。これは1981年までは耳鼻咽喉科の病床数24床であったのに対し、1982年からは病床数が40床に増えたことが大きく影響していると考えられる。また、1988年より減少傾向が見られるが、これは1988年の病棟工事による入院制限や、悪性腫瘍に対する治療法の変遷による入院の長期化等が影響していると考えられる。

悪性腫瘍の年次別推移においても若干の増加

図1 各疾患の割合

図2 悪性腫瘍の部位別頻度

傾向にあった。

次に、頻度の順に従って部位別に主な疾患について検討してみた。

1) 咽頭疾患

咽頭疾患の入院患者数は男性600名、女性402名の合計1002名であった。このうち習慣性アンギーナ、扁桃病巣感染症等により扁桃摘出術を目的として入院した患者数が612名 (61.1%) と過半数を占めていた。扁桃摘出術は近年減少傾向にあるとする報告^{1)~3)}が多いが、当科においては増減に関する一定の傾向は認めなかった。

図4に咽頭悪性腫瘍の年次推移を示した。

図のごとく年々増加傾向にあった。また、図5には咽頭悪性腫瘍の年齢別性別分布を示したが、男女比は3.5対1と男性に多く、男性は50歳代、女性は60歳代にピークがあった。近年増加傾向にあることや男性に多いことは諸家^{4)~8)}の報告と同様であった。

咽頭悪性腫瘍の部位としては上咽頭悪性腫瘍が77名と最も多く、次いで下咽頭悪性腫瘍65名、

図3 入院患者数年次推移

中咽頭悪性腫瘍62名の順であり、また、これらの男女比は、それぞれ4.9対1, 3.1対1, 2.6対1で、いずれも男性に多く、特に上咽頭悪性腫瘍は男性が女性の約5倍と多かった。

2) 鼻副鼻腔疾患

鼻副鼻腔疾患の入院患者数は男性567名、女性310名の合計877名であった。このうち慢性副鼻腔炎が293名(33.4%)と最も多く、次いで術後嚢胞148名(16.9%)、上顎癌143名(16.3%)、鼻出血120名(13.7%)と続いていた。

(単位：人)

図4 咽頭悪性腫瘍の年次推移

図5 咽頭悪性腫瘍の年齢別性別分布

図6に慢性副鼻腔炎と上顎癌の年次推移を示した。慢性副鼻腔炎は1982年より急増し、その後1987年より減少している。この急増は病床数の増加と一致している。つまり、病床数の増加により、入院の優先的な腫瘍性疾患を差し引いての病床数の余剰に対応するものと考えられる。また、1987年よりの減少は諸家の報告^{1)~3)9)}にあるように、慢性副鼻腔炎自体の減少傾向を反映していると思われる。

上顎癌に関しては特に増加あるいは減少傾向はないとの報告が⁹⁾¹⁰⁾が見られるが、当科においては減少傾向にあった。また、年齢及び性別に関しては、男女比1.6対1で男性に多く、男性が50~60歳代にピークがあるのに対し、女性は40~70歳代に幅広く分布していた。この点は、女性のピークも60歳代に一峰性にあるという諸家⁹⁾¹⁰⁾の報告と若干異なる。

3) 耳疾患

耳疾患の入院患者数は男性362名、女性369名の合計731名であった。このうち慢性中耳炎が

(単位：人)

図6 慢性副鼻腔炎と上顎癌の年次推移

153名 (20.9%)と最も多く、次いで中耳真珠腫143名 (19.6%)、急性感音難聴136名 (18.6%)、眩暈症103名 (14.1%)と続いていた。

図7には慢性中耳炎と中耳真珠腫の年次推移を示した。これらは共に年々増加傾向にあった。

4) 喉頭疾患

喉頭疾患の入院患者数は男性424名、女性126名の合計550名であった。このうち、喉頭癌が282名 (51.3%)と過半数を占め、次いで声帯ポリープ107名 (19.5%)、急性喉頭炎、蜂窩織炎などの急性炎症63名 (11.5%)と続いていた。

図8に喉頭癌の年次推移をしめしたが、年々増加傾向にあった。図9には喉頭癌の年齢別性別分布を示したが、男女比では10.8対1と男性に圧倒的に多く、60歳代にピークがあった。これらは諸家の報告³⁾⁹⁾¹¹⁾¹²⁾と同じ傾向であった。

5) 先天奇形

当科の特色として、小耳症を代表とした先天奇形に対する形成手術が多いことが上げられる。そのため、先天奇形を一つの疾患分野として独立させた。

図7 慢性中耳炎と中耳真珠腫の年次推移

先天奇形の入院患者数は、男性298名、女性177名の合計475名であり、耳介形成術を目的として入院した小耳症患者が347名 (73.1%)と最も多かった。この小耳症と唇裂口蓋裂の年次推移を図10に示した。小耳症は、男性223名、女性124名と男性に多く、また1978年までは増加傾向にあった。また、男女ともに約60%が右小耳症という結果であった。

また唇裂、口蓋裂は、男女比はほぼ同一であるが、最近は減少傾向にあった。これは口腔外科で取り扱う比率が高くなった結果と考える。

図8 喉頭癌の年次推移

図9 喉頭癌の年齢別性別分布

6) 気管食道疾患

気管食道疾患の入院患者数は、男性137名、女性80名の合計217名であった。このうち、気道異物と食道異物が多く、それぞれの全体の28.1%、35.5%を占めていた。図11に気道異物と食道異物の年齢分布を示した。

気道異物は、男性44名、女性17名の合計61名であり、諸家の報告^{13)~17)}と同様に男性が女性の約2倍と多かった。異物の種類としては、ピーナツに代表される豆類が48例(78.7%)と最も多く、他には義歯(4例)、玩具の鉄砲の弾(2例)、マチ針(2例)等が見られた。図11に示したように、気道異物はそのほとんどが0~4歳に集中しており、また0~4歳の53例のうち45例(84.9%)がピーナツ等の豆類であった。これも諸家の報告^{9)13)~17)}と同様であった。次に食道異物であるが、男性40名、女性34名の合計74名と男性が少し多かったが、男性が女性の約2倍に多いとする諸家^{14)17)~19)}の報告とやや異なる。異物の種類としては PTP が26例

(35.1%)と最も多く、次いで義歯11例、硬貨8例、魚骨7例と続いていた。年齢分布は0~4歳に最も多かったが、中高年層にも少数ながらほぼ均等に分布していた。0~4歳では硬貨、画鋸、玩具等が多く、中高年層では PTP と義歯が多かった。

7) 口腔疾患

口腔疾患(口唇を含む)の入院患者数は、男性122名、女性78名の合計200名であった。このうち、悪性腫瘍が150名(75.0%)と過半数を

(単位:人)

図10 小耳症と唇裂・口蓋裂の年次推移

図11 気道異物と食道異物の年齢別分布

図12 口腔悪性腫瘍の部位別性別分布

占め, とりわけ舌悪性腫瘍が88名と多かった。他の疾患としては良性腫瘍が25名あり, この中でも舌良性腫瘍が15名と多く, 急性炎症が16名, 外傷が5名と続いていた。

図12に口腔悪性腫瘍の部位と男女別を示したが, 舌, 口腔底, 硬口蓋, 頬粘膜の順に多かった。舌悪性腫瘍が口腔悪性腫瘍の過半数を占めるのは諸家^{20)~22)}の報告と同様であった。また, 硬口蓋以外の部位では男性に多かった。

8) 唾液腺疾患

唾液腺疾患の入院患者数は, 男性63名, 女性48名の合計111名であった。耳下腺, 顎下腺の腫瘍が合計76名例(68.5%)と過半数を占め, 他には唾石19名, がま腫2名等が見られた。

唾液腺腫瘍の良悪性別, 男女別を図13に示したが, 良性腫瘍の方が多く, また, 良性腫瘍, 悪性腫瘍ともに耳下腺に多く, これらは諸家^{23)~27)}の報告と同様であった。

9) その他

その他の疾患では, 顔面外傷が66名と最も多く, 他の代表的疾患としては甲状腺腫瘍26名, 頸部リンパ節炎24名, 正中顎嚢胞21名等が見られた。

ま と め

1976年1月より1990年12月までの15年間の入院患者延4448名について統計的観察を行った。

1. 咽頭疾患が最も多く, 次いで鼻副鼻腔疾患, 耳疾患, 喉頭疾患, 先天奇形の順であった。

2. 咽頭疾患では, 習慣性アングーナ, 扁桃病巣感染症等により, 扁桃摘出術を目的として入院した患者が最も多かった。また, 咽頭悪性

腫瘍の増加傾向が見られた。

3. 鼻副鼻腔疾患では, 上顎癌の減少傾向が見られた。

4. 耳疾患では, 慢性中耳炎と中耳真珠腫の増加傾向が見られた。

5. 喉頭疾患では, 喉頭癌の増加傾向が見られた。

6. 先天奇形では, 小耳症が多かった。

7. 気管食道疾患ではともに異物が多く, 気道異物は4歳以下の小児に多く, 食道異物は4歳以下と60歳代に二峰性のピークを認めた。

8. 口腔疾患では, 悪性腫瘍, 特に舌癌が多かった。

9. 唾液腺疾患では, 耳下腺, 顎下腺の腫瘍が多かった。

参考文献

- 1) 志賀伸之, 小林俊光, 高坂知節: 東北大学耳鼻咽喉科における入院患者統計とその推移. 耳鼻臨床 80: 1719~1728, 1987.
- 2) 荒川栄一, 高坂知節: 我教室六年間の耳鼻咽喉, 頭頸部, 気管食道疾患の年度別推移. 耳鼻 25: 143~145, 1979.
- 3) 中島恒彦, 松元一郎, 朝隈真一郎, 他: 耳鼻咽喉科疾患の年度別推移. 耳鼻 19: 594~600, 1973.
- 4) 佐藤博久, 柳下恵子, 持松いづみ, 他: 咽頭癌の死因統計. 耳鼻 34: 376~383, 1988.
- 5) 大河内幸男, 小針啓生, 大谷 巖, 他: 当教室における上咽頭悪性腫瘍の統計的観察. 耳鼻臨床 78 増1: 976~982, 1985.
- 6) 真島一彦, 小野 勇, 海老原敏, 他: 中咽頭側壁悪性腫瘍の臨床像. 目耳鼻 85: 1554~1561, 1982.
- 7) 戸田勝也, 小笠原寛, 兵 典子, 他: 教室における下咽頭癌の治療成績. 耳鼻臨床 補4: 47~52, 1986.
- 8) 鶴田至宏, 佐藤武男, 宮原 裕, 他: 下咽頭癌患者死亡例の臨床的検討. 日気食会報 37: 305~310, 1986.
- 9) 竹内和郎, 大槻好正, 大谷 巖: 当教室28年間の入院患者統計. 耳鼻臨床 78: 999~1007, 1985.
- 10) 平川勝洋, 田頭宣治, 杉本嘉朗, 他: 過去10年

図13 唾液腺腫瘍の部位別性別分布

- 間の当教室における上顎悪性腫瘍の統計的観察.
耳鼻臨床 74 : 2104~2110, 1981.
- 11) 小野 勇 : 疫学的にみた喉頭癌の動向.
JOHNS 4 : 1171~1174, 1988.
- 12) 栗田口省吾, 宮野和夫, 円山宏洋, 他 : 気管気管支異物63例の臨床的検討. 日気食会報 31 : 315~321, 1980.
- 13) 大戸武久, 内田 豊, 遠藤朝彦, 他 : 当教室10年間の気道および食道異物の臨床統計的観察.
日気食会報 32 : 241~248, 1981.
- 14) 仁瓶誠五, 樋渡章二, 大八木章博, 他 : 当院における気管気管支異物10年間の統計的観察と興味ある若干例について. 耳鼻臨床 76 : 753~763, 1983.
- 15) 牧 清人, 安岡義人, 原田 紀, 他 : 当教室25年間の気管, 気管支異物の統計的観察. 耳鼻臨床 77 : 661~671, 1984.
- 16) 堤康一郎, 戸田行雄, 飯田 順, 他 : 当教室10年間の気道及び食道異物の臨床統計的観察. 耳鼻臨床 補 9 : 59~65, 1987.
- 17) 栗山 博, 武田一雄, 高橋宏明, 他 : 大阪医科大学耳鼻咽喉科における最近 6 年間の食道異物に関する統計的観察. 日気食会報 29 : 208~214, 1978.
- 18) 西條 茂, 郭 安雄, 佐藤雅弘, 他 : わが教室食道異物症例の統計的観察. 耳鼻 25 : 313~317, 1979.
- 19) 河辺義孝 : 口腔の腫瘍—とくに病因と臨床病理を中心として—. 耳展 26 : 120~127, 1983.
- 20) 田中信三, 川口寿郎, 平野 実 : 口腔癌治療の変遷と現状. JOHNS 6 : 147~151, 1990.
- 21) 井本祥子, 藤田豪紀, 金井直樹, 他 : 当教室における口腔扁平上皮癌症例の検討. 耳鼻臨床 補15 : 77~85, 1987.
- 22) 村上政文 : 唾液腺腫瘍の臨床病理学および免疫組織学的研究. 目耳鼻 91 : 247~261, 1988.
- 23) 寺倉直明, 田中克彦, 吉村 理, 他 : 耳下腺腫瘍の臨床統計—当教室10年間の集計—. 耳鼻 34 : 698~702, 1988.
- 24) 鶴田至宏, 佐藤武男, 宮原 裕, 他 : 唾液腺腫瘍92例の臨床統計. 目耳鼻 89 : 724~730, 1986.
- 25) 金子敏郎, 林崎勝武 : 唾液腺悪性腫瘍. JOHNS 2 : 403~408, 1986.
- 26) 竹内 亘, 生駒尚秋, 神崎裕士, 他 : 唾液腺腫瘍57例の臨床的検討. 耳鼻 32 : 997~1002, 1986.
- 27) 金子まどか, 柊 光一, 古川政樹, 他 : 耳下腺腫瘍の統計的観察. 耳鼻 33 : 261~268, 1987.

(別刷請求先 : 山本真一郎
〒467 名古屋市瑞穂区瑞穂町川澄 1
名古屋市立大学医学部耳鼻咽喉科学教室)